世にも不思議なマクドナルド

この日、Dタウンのショッピング・モールの駐車場で迎えた朝は、白々としたものだった。窓のカーテンを開けると、そこにはとりつくしまもないほど卓上の製図どおりに造られた無機的な街並みがあった。陽差しを浴びてまばゆく光り輝く様子がいっそう街を無味なものにしている。時計を見るとすでに一〇時をまわっている。こんなときは動きはじめた街の中でいまだ屋台を食っている浮浪者のような気分になる。その日は朝飯を車の中でつくって食べるのが慣例だったので外で軽食をとることにした。

一〇〇メートル先に、太陽に照らされて輝くアルファベットの『M』の文字が見える。

ニッコリ笑ったような、あの特徴のある『M』の文字を見ると、なぜかちょっとホッとする。いかなる辺境、異郷においても、その見慣れた『M』の文字に接すると最低限の食事は確保されたというわずかな安堵感が走るのだ。

しかしながら、この街の『マクドナルド』はちょっと変わっていた。

ドアを開け、一歩中に足を踏み込もうとしたとき、異質な空気を感じたのだ。

店内のテーブルに座っている多くの人々が、いっせいにこちらを振り向いたのである。

客はみな白人だった。冷ややかな視線がこちらに向かってくる。

私は一瞬立ち止まった。

すでにこのアメリカという国の人々、なかでもある種の白人が差別的であることを数多く経験していた。レストランなどで食事をとっていて、ふと目が合った向こうのテーブルの白人が汚物を見るような視線でじっとこちらを見据えていることがある。はじめのころはその意味がつかめず反射的に目をそらすことが多かった。しかしその視線の意味に気づいてからは、私はその視線に挑戦した。相手が目をそらすまで絶対に私は目をそらさなかった。ただ、相手が差別的な視線を送ってくる場合、これまでの経験では彼らは私の気づかぬ死角から視線を送ってくる場合が多かった。

その日のマクドナルドのような直接的なものははじめてだった。私はドアの前で立ち止まった。

しかしなぜか私はそのとき、こんな光景を、いつかどこかで見たことがあるな、と妙に客観的にその光景を見ていた。

私は奇妙なことに西部劇映画の一シーンを思い出していたのだ。

■

荒野にて。

西部の、とある小さな町の居酒屋に、とつぜん他所者が現われる。

ドアを開けると、田舎の社交場にたむろする常連たちの視線がいっせいに彼へと集まる。

よくあるシーンだ。

このお決まりシーンは、ドアを開ける者の〝見た目ショット〟で撮られる場合が多い。カメラがなめる人々の視線には、警戒と警告と、そして排他の色が漲える。他所者はドアの前で一瞬立ちすくむが、やがて冷静を装って、カウンターに向かって歩みはじめる。

私もそのようにした。

ゆっくりと歩きはじめる。

カウンターに向かって通路を歩む背中にそのときも多くの視線を感じる。

〝……まったく馬鹿げたほど、あのドン臭い西部劇そっくりじゃないか〟

酒場ではカウンターの前に立つ他所者が噛みつぶしたような声で「バーボン」と言うと、白シャツに黒のチョッキを羽織った、髭の長い頭の禿げあがったマスターが、グラスに酒を乱暴に注ぎ込む。そして、まるで犬にでも物を与えるように、グラスをカウンターの上に滑らせる。

「コーク　アンド　ハンバーガー　プリーズ」

私の注文はバーボンみたいに格好よくはない。

カウンターを挟んで対面している人間もただのファスト・フード・ショップの制服だ。

たぶん彼女は黒人とは呼べないだろう。おそらく何代も前からの白人と黒人の混血で、わずかにカラーが入っているが、その雰囲気は白人のそれである。悪い予感がした。近親憎悪というべきか、この種の人間がしばしば黄色人種を目の敵にすることがあるからだ。

そして、めでたく予感は的中する。

彼女は意地の悪い小学校の先生のように、単純な英語を私にリピートさせた。

顎をしゃくり、眉間に皺を寄せ、鼻を鳴らし、わからない、というジェスチャー。

「コーク　アンド　ハンバーガー」

彼女の目をじっと見据えて、友好的にもう一度ゆっくりと繰り返す。

「バードン?」

彼女はわざとらしげに小首をひねる。

眉間から鼻にかけていびつな皺を寄せている。

まるで臭うものを目の前にしたかのように。

アメリカをはじめて旅する私が街で「マクドナルドはどこですか?」とアメリカ人に尋ねたとしよう。たぶんアメリカ人は必ず何度も私の言葉を聞き返す。これは仕方のないことだ。日本語のマクドナルドほど原語と似ても似つかないものになってしまった言葉も珍しい。それはMcDonaldという人の名前であり、農耕民族が畑を耕すような調子で言う、あのマクド・ナルドではない。〝マック〟の〝ク〟はほとんど聞き取れない。〝マ〟と言ったが早いか、素早く次の〝ドナルド〟に移る。〝ドナルド〟は〝ダナルス〟と聞こえる。〝ダ〟にアクセントがあり、〝ス〟がまた聞こえない。

これはほとんど別種の言語だ。

最初にマクドナルドのレッスンを受けたのは、ニューヨークの近代美術館においてである。別にそこでマクドナルドという言語に関する発音の講座を開いているわけではない。地階にマクドナルドがあるというので、廊下で館員らしい老婦人に道筋を尋ねたのである。彼女は手に持った額吊り用の棒を強く握りしめ、首を右に三〇度傾げ、顔を激しく歪めながら私の言葉を聞き直した。実に一〇回以上もである。これは拷問に等しい。しかし彼女の場合は私の変わった英語に刑罰を与えようとしたのではなく、律儀に理解しようと努力した結果が、そのようなオーバーな態度となったのだ。

私は仕方なく、自分の掌にボールペンであの特徴のあるMの文字を書き、さらにその横に湯気の立つハンバーガーの絵も描いた。「これはあったかいんだよ」と言いながら湯気を描いているとき、とつぜん彼女は「オー　イエース」と大きな声を出した。そして、

「マッ・ダーナルス」

と廊下に響きわたる大音とともに、棒を地面に突き立てて言った。

「ヒャーリズ　ヒャーリズ（ここにある、ここにある）」

マクドナルドはどうか知らないが、〝ハンバーガー〟および〝コーク〟という言葉を他者に通じさせることができないかぎり、アメリカでは生きていくことができない。実際に私は旅行中にすでに二〇〇回以上はこの言葉を使ってきた。そして、日々かなりスムーズにコーク・アンド・ハンバーガーを手に入れた。だからカウンターの向こうの女がわからないという態度に出たのは、明らかに嫌がらせである。

三度尋ね返してきたとき、それまで抑えていた怒りが吹き出した。

しかし、ぐっと抑えた静かな調子で言う。

「きのうアフリカからやってきたのかな、あんた」

差別語ぎりぎりの愚弄である。我ながらとっさによくできたと思う。

女の顔色が変わった。彼女は私のいたって簡単な英語を理解しなかったにもかかわらず、それよりも何倍か複雑な英語を即座に理解したのだ。彼女はメモと鉛筆を投げ出し、こちらを睨みつけ、押し殺すような調子で「シット（くそ）」と言った。不潔な女だ。彼女はそっぽを向いた。そして、ちょうど入ってきた別の客に注文伺いの合図をする。

私は彼女の踊り横の白人の店員にあらためてコーク・アンド・ハンバーガーの注文をする。白人女は一部始終を知っていながら、無表情を装っている。そして実にさりげなく、そしてかなり冷ややかな態度で注文品をカウンターに置く。

私はそれを受け取って、テーブルに向かう。

人々の視線は、ドアを開けたときのように露骨ではなかった。しかし、それとなく私の行動を注視しているのがはっきりわかる。

〝……奇妙なマクドナルドだな〟

私は窓際の空いているテーブルに腰をおろし、コーラで喉の渇きを癒しながら思う。

〝この敵意に満ちた店の空気はいったい何なのだろう……〟

最初に思い当たったことは、街のカラーを私が乱しているということだ。カラーとは皮膚の色のことである。この新興の街は一つの色によって塗り込められていた。きのうの夕方ショッピング・モールに入ったときもそうだった。雑多な人種の入り混じるアメリカの街と比べると、そこに出入りする人々はおそろしく単一だった。ホワイト・オンリーということだけではない。その階層、雰囲気、知性の程度、服装、ヘアースタイル、身のこなし。そのすべてが単一に見えた。その中に入った黄色人種の私は妙な違和感を覚えたものである。そこでも視線を感じた。しかし、このマクドナルドの中の雰囲気はさらに特殊だ。まるで異人種御法度のサロンでもあるかのように、そこには排他的雰囲気が満ち満ちている。

雑多な価値観や民族が入り混じる多民族国家のアメリカの街において、マクドナルドほど純粋にアメリカ的空間はないのだ。それはアメリカという国の中にある、さらなる『純アメリカ国家』であるとすら言える。

その空間にアメリカ国粋主義を感じる理由はいくつかあるが、その一つはマクドナルドにアジア系やヒスパニック系の店員が見当たらないということだ。

それはおしなべて白人であるか黒人である。

白人と黒人とは、この国が形成される初期の段階からアメリカ大陸に移住した原アメリカ人といえる人々である。比較的最近になって参入した、アジア系やヒスパニック系を彼らは歓迎しているようには見えない。アメリカ人の芸能、文化、スポーツの分野で白人や黒人のスターは輩出しても、黄色や褐色が出ないのは、そのなによりの証拠である。かりにすこしは話題になるイエローが出たとしても、それはヒーローとしてではなく、日々の話題に色を添える道化役にすぎない場合が多い。

アメリカ
藤原新也

情報センター出版局　1990